

ラ

グビー選手のような大柄な男性Sさんと別れた時の、その背中がなぜか寂しげだった。やっぱり自分はダメ人間だと後悔の念がそのように見せていたのだろう。一礼しながら、「生まれてくる子供のため、妻のために、もうパチンコはしません。指導していただいております。ごさいます」と言って、Sさんは向きを変えて駅の改札口に向かった。

「会社に行きたくない」から始まった相談だが

一か月だけでも面談は5回を数えた。妻が同席した面談も一回あった。何よりも毎日のようにかかってくる電話が異常だった。最初からパチンコ依存が絡んだ相談ではなかった。

「仕事についていけない。このままでは使い物にならないだろう。はじめな自分を見るだけの会社には行きたくない。クリニックの医師から見放されたようだ。どうしよう」というのが相談の動機だった。

人それぞれ能力が違う。短所もあれば長所もある。他人と比べないこと。比べるなら過去の自分と

パチンコ依存

第9回

新「相談現場からの報告」

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

何にでも頼り自立できない「依存性人格障害」の難しさ

比較しなさい。以前より成長した自分に気づくはず——このような対応で分かってもらえないかもしれない、という心づもりで会った。大きな隠し事があったことにはまったく気づかなかつた。面談を重ねていってその覆面が取れていく。

面接でウソをついたが入社でき彼女も喜んで

大学卒業時は就職氷河期と呼ばれる厳しい時代だった。説明会に顔を出した企業は二十社近く。最終面接に残ったのが一社だけ。それが現在の流通業の会社だった。「面接では少しはウソをついたつていいぞ」「オーバーに自分を売り込もう」と友人たちと話し合っていた。経済学部ということ、経理も少しは学んできたこと、パソコンスキルも人並みに可能、と答えた。もちろんウソだった。採用されればこっちのもの、という思いが強かった。

採用通知が届いた時は、まさかと思っていただけにびっくりした。業界では中堅企業だったが、両親や親類からも祝福された。「大学では遊んでばかりいたと思っていたのにすごいじゃない。やること

はやっていたんだ」と付き合っていた彼女からも喜ばれた。勢いに乗って結婚を約束した。

経理もパソコンも苦手 重荷の上に嫌悪感だけ

配属部署は地方支店の経理システム部。海に面した風光明媚な都市だった。落ち着いたら彼女を迎える約束もした。しかし、支店だから処理量が少ないとはいえ、仕事にはまったく自信がなかった。経理という言葉、システムという用語自体門外漢のSさんには嫌悪感しか浮かばなかった。

この支店に本社採用の新人社員が配属されることは珍しかったので、それなりのスキルを備えた新人として迎えられたのだったが、重荷だった。といって「私は何もできません」と言うこともできなかった。プライドがあった。

支店No.2で、総務も兼務する部長以外はベテランの女性社員が5名。いきなり、周囲では経理ソフトの専門用語が飛び交う。商品の流れをチェックするパソコン画面も魔法のような世界に感じた。最初こそ「誰だって慣れるまでは時間がかかるからね」と優しい言葉

をかけられていたが、もともと学んだことはない分野。慣れてどうなるものではないことはSさん自身が一番知っていた。

見よう見まねも限界で 叱責されて休みがちに

それでも見よう見まねで何とかこなしてきた。女性社員の中には、率先して教えてくれる人もいた。都会だったらこんな親切な人はいないだろうな、と思いありがたかった。

3か月後、いよいよひとり立ちの時期がやってきた。「これやっておいて」と依頼された仕事をこなすのに5時間ぐらいかかった。さすがに部長から呼ばれた。ふだんは別室にいる部長だが、社員から報告があったのだろう。「彼女たちなら1時間もかからないぞ。そんなことでどうする。みんな期待していたのにだめじゃないか」と叱責された。ただ頭を下げるだけだった。

一人暮らしの朝、出勤する気分にはならない日が続いた。一度「具合が悪いから休みます」と言って休むと、それが止まらなくなった。何とか出勤しても、仕事が

振られそうになると、そっと席を離れ、休憩室で頭を抱えた。

部長指示で心療内科へ 新婚の妻には言えない

まもなく彼女が押しかけてきた。衣類や生活用品も届き、一緒に生活が始まった。式は後回しということ、婚姻届けも出した。とてもうれしかったが、心から喜べる状態ではなかった。何もできない、彼女を幸せにもできない。嫌な場面に直面した時、Sさんはただ逃げることしか浮かばなかった。学生時代もそうだった。サークル活動もうまくいかないとそこから逃げた。自分で乗り越えて行こうという気持ちになったことは一度もなかった。成り行きに任せることで生きてきた。

朝は出勤するものの、午後は高台で海を眺める日が多くなった。誰にも干渉されない時間だった。会社には戻らず、退社時間までひとりで過ごした。部長に呼ばれ、顔色も悪いし、覇気がないと言われて心療内科を受診するように言われた。病気になるば仕事をしなくていいのか、そう思って抵抗しなかった。結果は「抑うつ状態

で1か月の休養が必要」という診断だった。

しかし妻には言えなかった。新生活を期待してかけつけた、その夢を砕くことはできなかった。相手を思う優しい気持ちという一面は指摘できるかもしれないが、本当のことを誰にも言えない、自立心のない性格の現れでもあった。

嫌な場面からの逃避で パチンコとマンガ喫茶

毎朝ふつうの出勤時間に家を出た。抑うつ状態という診断だったが、仕事から離れている時は症状は出なかった。海を見ることが飽きてくる。雨の日はマンガ喫茶で時間をつぶした。それにも飽きて、向かったのがパチンコ店だった。もともと学生時代から何度か経験がある。当時は小遣いでの遊びだからのめりこむことはなかったが、儲かった時の感覚は忘れていなかった。

Sさんにとって、この地方都市でのパチンコ通いも、儲けるといふ目的ではなく、嫌な場面からの逃避先だった。都会同様、店内の騒音はすごい。それをうるさいと思わないのがパチンコに通う多く

の共通点なのだろう。大音響の音楽、天井から壁までホール一帯を走る光の乱舞が、適応できない職場を完全に忘れさせた。

マンガ喫茶とパチンコの掛け持ち、時々海岸散策の時間を過ごして、あつという間に休職期間の1か月が過ぎた。ここまでは小遣いだけで何とかしのげた。休職明け、「ゆっくり休めたか。元氣そうだな」と部長が迎えてくれた。

また休職で本社へ転勤 何も知らぬ妻は大喜び

もうその顔を見ただけで、Sさんは意気消沈した。仕事は足踏み状態。女性社員も呆れたような顔をして話しかける人はいなかった。1か月と持たないでまた会社には足が向かわなくなった。二度目の休職。診断書の期間は2か月で、適応障害という診断名に変わった。ここに至っても



妻には話せず、またマンガ喫茶とパチンコ通いの毎日になった。もう資金もなくなり、会社に借金を申し込むこともできない。カードローンに手を出した。

休職に入って1か月が過ぎたある日、初めて支店長から呼び出され、本社転勤を命じられた。「期待通りの仕事してもらえなかった。支店では業務がない。本社にこっちからお願いした。本社ならいろんな仕事があるから頑張ってもらいたい」と語ってくれた。お払い箱になったか、とSさんは思った。夫の行為や職場での出来事を何も知らない妻は喜んだ。嫌いな町で

はなかったが、都会育ちの妻にはやっぱり味気なさも感じていたようだ。

周囲への不満だらけも 医師の診断は「働ける」

あわただしく引越しの準備をして転勤。会社が用意した社員用の借り上げマンションでの生活が始まった。支店と違って本社ほどの部署も忙しい。ひとりの社員に構ってはいられない。配属先はやはり経理システム部門。しかも、新システム構築のメンバーに入れられた。プログラムも作らなければいけない。「話が違う」とSさんは絶句した。

上司からは「短期間とはいえ支店のシステムを理解したろうからぜひ学んだことを生かしてほしい」と指示された。うつ病診断で休職したことも、業務がほとんどできなかったことも、何も支店からは引き継がれなかったのか。完全に無視されたのだ。

支店長への怒り、周囲への身勝手な不満だけが

募り、1週間で入社する意欲も消え、体調不良を理由に休んだ。こども心療内科に駆け込んだ。地方都市での診断結果を話した。しかし「休養を要するほどの症状ではない。希望するような診断書は書けない。あなたは十分働ける」という診断だった。医師への不信も生まれた。

会社の通知で欠勤知り 怒る妻は「何してたの」

自暴自棄になったSさんは、またパチンコに逃げた。地方とは違って娯楽施設はたくさんある。時には風俗店にも駆けこんだ。病欠と有休を使い、ほとんど会社には行かなかった。パチンコ店だけが一人になれて快感を持てる空間であることは地方と同じだった。回数がどんどん増え、カードローンの借金も限界点に達していた。返却する当ては毛頭なかった。明らかに依存状態であることを自分でも理解できた。妻に本当のことを言わなければ、とSさんも考え始めた。

そんなある日、帰宅したSさんに投げかけられた妻の一言がSさんを痛撃した。「あなた、会社に

行っていないって本当なの？なんだかおかしいとは思っていたけれど、きょう会社から電話があったの。旦那さんの状態はどうですかって。びっくりしたわ。いったいどこで何をしていたの？」

返す言葉はなかった。ただ頭を下げた。妻の顔を見ることもできなかった。内心、ここを逃げ出して電車に飛び込もうと本気で考えた。本当はその勇気もないふがいなさは、自分が一番よく分かっている。いざとなれば何とかなる、という甘えっぱなしの人生を送ってきたのだから。

「おなかの赤ちゃん」が二人の再出発を決めたが

支店時代からパチンコで出費を重ねたことを白状、カードローンの借入証を妻に見せた。

長い沈黙があった。やがて妻は能面のような顔をして冷たく「どうするつもりなの」とだけ言葉を吐いた。「あなたの責任よ。何とかしてよ」と付け加えた。

「すまない」

「なによ今さら。だまされていた自分もバカだった」

「貯金ないか」

「何よ、何なのそれって。あるわけないでしょ。就職してまだ1年もたっていないのよ。給料も安いんだから」

「やり直したい。助けてくれ」

「別れるしかないじゃない。もう」

このような会話が交わされ始めた段階での相談だった。何かをアドバイスできる時期でもなかった。当事者たちで打開していく方法しかない。それをサポートすることしかできない。

Sさんは離婚を迫られてもやむを得ない、と思いつつ、別れたら墮落した生活になるだろうと考えた。ここに至っても自分で打開する気力はなかった。もう有休も病欠も取れない段階になった時、妻も同席した。そこで打ち明けられたことは、おなかの中に赤ちゃんがいること。まだ生まれてこない赤ちゃんが二人の関係をつないだ。夫婦の決心をそのまま認め支持した。

「どうすればいい」との指示求める電話が続く

会社に戻らなければ、というSさんに対して、これまでの非を謝

依存性人格障害の診断基準 (米国精神医学会作成・DSM-IVより)

「他人に世話をされたいという過剰な欲求があり、そのために従属的ですがみつく行動をとり、分離に対する不安を感じる」広範囲な様式である。以下の8つの基準のうち、5つ以上あれば、障害にあてはまる。

- ① 日常の些細なことでも、他人から有り余るほどの助言と保証がなければ決断できない。
- ② 自分の生活のほとんどの主要な領域で、他人に責任を取ってもらいたがる。
- ③ 他人の支持または是認を失うことを恐れて、他人の意見に反対を表明することが困難である。
- ④ 自分の判断や能力に自信がないため、自分で計画を立てたり物事を決めることができない。
- ⑤ 他人から愛情や支持を得るために、自分の不快なことでもやってしまうことがある。
- ⑥ 自分で自分のことができないという強い恐怖や無力感がある。
- ⑦ 親密な関係が終わった時に、自分を世話して支えてくれる別の関係を必死で求める。
- ⑧ 自分が世話をされずに放っておかれるという恐怖に、非現実的なまでにとらわれている。

り、自分の能力では今のシステムの業務は無理なことを正直に話すように伝えた。ところが、会社で直面した様々なことについて報告する電話が入り、「わたしはどうすればいいんでしょう」「どう返事すればいいんでしょう」と、こちらの指示を求める内容だった。自分で決めなさい、と怒鳴りたい心境だったが、「あなたは私にも依存していますね」とだけ答えた。

う説明である。Sさんの場合、①③④⑥⑧は当てはまるだろう。ここに書かれていることの逆の思考と行動をする以外に改まらない。それができないから依存症になるのだが。駅で別れた後も、また繰り返し返すかもしれない、という確信に近い思いは消えなかった。

Sさんの状態は「依存性人格障害」に当てはまると見立てた。パチンコ依存、快楽への依存、他人への依存—さまざまな場面で依存先を探し求めてきたことは明らか

だった。

アメリカ精神医学会が作成し、世界の精神科医師が参考にしている「精神疾患の診断基準」(現バージョンはDSM-IV)によれば、「依存性人格障害」は別表のように8項目の範疇がある。5つまたはそれ以上が当てはまれば診断可能とい

柏木勇一(かしわざい ゆういち)

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業(Employee Assistance Program)でカウンセラー及び研修講師として活動。厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士